

## 『日本で 100 年、生きてきて』

2015 年 08 月 10 日

むのたけじ氏が百歳を迎え、上記の表題で 86 篇のエッセーを編集し、上梓している。むの氏は朝日新聞の記者をしていたが、大本営の発表を流し続け、敗戦を迎えた時、ジャーナリストとしての責任を感じ新聞社を辞めた。故郷の秋田県横手市に帰り、週刊新聞「たいまつ」を創刊し、以来、そこから、発信し続けてきた。反骨を貫くむの氏の書かれたものは本質を突き、自由でユーモアがあり、楽しく、勇気を与えてくれる。

上記の本を読み、教えられ、考えさせられた 3 点を、私の感想を入れて書いてみたい。一つは、日本は「戦争責任」を曖昧にしてきたことである。むの氏はドイツと日本を比べ、「ドイツ国民は、これはナチスだけの問題ではなく民族全体の問題だ、と受け止めて国民で裁くことにした。そして、アンデスの山奥までナチスの残党を捕まえに行ったでしょ」、日本については「迷惑かけた中国や朝鮮やアジアの人たちへの一生懸命のお詫びも、あまりない。本当にきちっと考えなかった」と書いている。天皇は米国の占領政策に用いられて免責され、東京裁判で 7 名を処刑して、戦争責任問題を終わらせてしまった。国民全体で責任を問わなかったことが歴史修正主義者を生み出し、アジア諸国との関係をギクシャクさせている。責任を問い、負うことを曖昧にしたため、大きい者の責任は不問にされ、トカゲのシッポ切りが恒常化した。過ちを認め謝罪することは勇気があるが、人間に立ち返り、和解と共生を可能にする。むの氏は責任を感じて新聞社を辞めたが、留まって、誤りに陥っていった経過を克明に追う方が良かったと反省しておられる。

二つ目は、「私が私になる」ことである。むの氏は「人間の道徳は、他人から教えてもらうものではない。自分で気づいて、学ぶものだ」と書いている。自分で見て、考え、自分の言葉で言い、行動する。自立的、主体的になるということであり、これが自分を大切にすることである。自分を大切にすることが他人の大切さを理解し、共にあろうとする。この問題に関し、私はマルチン・ルターの宗教改革を思い出す。墮落していたカトリック教会に対し、「95 ヶ条の提題」で抗議した。抗議の根幹を支えた信仰はパウロが力説した「信仰義認」であった。主イエスを信じる者は神に義（よし）とされる。「義」とは私は私であって良いという、今の言葉で言えば「アイデンティティ」の確保である。信仰義認の信仰は王や領主やカトリック教会に支配されるのではなく、神の前で「私になる」ことを保証したのである。これが、近代を開く道しるべになっていった。今日、私の言葉を持ち、私の行動を貫徹することは容易ではない。しかし、むの氏が常に言う「人間になれ」という主張は、心に響く。

三つ目は、下記の言葉である。「とこかく、この年になって確信できたことは、人間は何のために生まれて何のために生きているか、ということへの答えだ。前にも言ったけど『喜ぶため、楽しむため』だ。泣くためではなく、笑うため。それでねばだめだ。」「敗戦から 30 年もたって、60 歳を過ぎてから『あれっ、人が生まれ、生きるのは何のためなのかな？』って。そして少しずつ、遊ぶことへの罪悪感が薄れていった。」私は旧満州から引き揚げ、貧しい中で育った。牧師の生活も貧しかった。働くことが良いことで、遊びには抵抗感があった。クリスチャンになって苦難を負うことが信仰であると、肩を張って言い聞かせてきた。むの氏は『希望は絶望のど真ん中に』という本を著している。絶望を乗り越えて「喜ぶため、楽しむため」と気づいたのであろう。そして「楽しむというのは、一人ではしないな」と言う。喜びを分かち合う友だちを作ることを心がけようと思う。